

水神信仰の一側面

大 藤 時 彦

日本人の民族信仰をごく大ざっぱに取上げると、氏神信仰と自然信仰の二つにわけられる。自然信仰とは日月、山水風雨などの神靈についての信仰であるが、私はここにその中の水神信仰について少し考察してみたいと思う。

水の神や山の神ないしは火の神に対する信仰はわが国の常民の間に一般的に見られるものであるが、それらの神々の性格はかなり漠然としたものである。これらの信仰はもともと人類に共通する、いわゆる原始信仰といわれるものにほかならないともいえるが、日本の民間信仰にはそのような一般性のみとめられることは否定できないにしても、ながい歴史の経過の中において、いろいろな要素が混入して複雑化され特殊な信仰形態がつくり出されている。ここに問題として提出する水の神なども、水界の種別によって海の神、川の神、泉の神、池の神、沼の神、井戸神、堰の神などと称せられるものがあり、いずれも水の神から分化したものと想像され

るが、それぞれ独自の性格と機能とを持っている。水の神系統の特色の一つはいわゆるヌシ（主）といわれるものの存在である。水の主は多くの神話伝説の主人公として語られ、後世になると信仰から離れて怪談として伝えられることにもなっている。水の神の信仰はしたがってこれらの説話伝説から推してその本来の姿をうかがうことができると思う。

その一つの試みとして私はここにやゝ主題から離れるが、水蜘蛛の術といわれる水界伝説を最初に取上げてみたい。高木敏雄氏の「日本伝説集」の中に、水界伝説として竜蛇、蜘蛛、河童の三伝説をあげてある。これらはいずれも水の主とされているものであるが、この中の蜘蛛について次のような伝説が同書に掲げている。

「仙台の瀬橋の上手に洩がある。昔、土地の男が何時ものように此処で釣をして見ると、此日に限って魚が一つも取れぬ。不思議だと思っていると、小さい蜘蛛が、何だか黒い物

を齧えて淵から出て来て其男の足の先につける。可笑しいと思つて見ていると、蜘蛛が其儘淵へ入つて、やがて又出て来る。矢張り黒い物を持つてゐる。それを又男の足につける。汚ないと思つて男は其黒い物を取つて傍の柳の太木に擦りつける。蜘蛛は相変らず淵を出たり入ったりして黒い物を持つて来てつける。男は一度々々それを柳へ持つて行く。暫くすると、えらい音がして柳の太木は引仆されて淵の中へ引込まれた。男が驚いてゐると淵の中から賢い賢いと云う声がした。

其時から此淵には賢淵と云う名がついた。」

この賢淵には蜘蛛が主に成つてゐる。近くの源兵衛淵では鰻が主に成つてゐて、此蜘蛛と鰻とが戦争をしたと云う話が残つてゐるそうである。

次にこれから遠く離れた九州肥後の例が二つあげてある。すなわち勢返し（せがへし）の滝と題して次のような話がある。

「肥後菊池郡竜門村の奥に、勢返し（せがへし）の滝というのがある。昔、村の者が此処の滝で魚を釣つてゐると水の中から蜘蛛が出て来て男の膝頭に絲をつけてまた水の中へ沈んだ。男は不思議なことに氣味が悪くなつたので、其絲を膝頭から取つて近くの柳樹にすりつけて置いた。すると間もなくえらい音がして、柳樹は根こそぎにされて淵の中へ引込まれたそうだ。」

同じ肥後のおとろしが淵にも同様の話がある。

「肥後の国阿蘇山の南の谷の中央を白川が流れてゐる。非常に蜘蛛の多い所で、土地の者が魚釣に行つて竿も糸も蜘蛛の巣のために台なしにされて帰えることが度々あった。昔、

或男が此淵で釣をしてゐると一匹の蜘蛛が泳いで来て男の足を四、五度廻つて、又向うの岸の岩の方へ泳いで行き、又渡つて来ては足を廻り又向うへ泳いで行く。男は氣味悪くなつて暫く様子を眺めてゐると、凡そ十四、五度も蜘蛛が往復したかと思ふ頃、自分の穿いてゐる草履から向岸まで小指の大きさ位の糸が一筋できた。暫くすると何やら恐しい音がして、草履は宙を飛んで向岸へ引きつけられた。男は足を取られずに助かった。若し草鞋か素足であつたら命を取られた処を角結びの草履を穿いてゐたので仕合せだった。今でも此淵へ行く者は必ず角結びの草履を穿くことにしてゐる。」

この三つの例は、いずれも大同小異であるが、二番目のものが最も普通の例である。最初の二つは蜘蛛の糸を柳の樹につけかえたのに、三番目のは自分の足につけたままにしておいたが、角結びの草履の御蔭で助かつたことになつてゐる。糸を結びつけた木は杉の木などの例もあるが、柳や柳の切株というのが多いのは意味があると思う。柳田国男先生の「信州随筆」に、「しだれ桜の問題」という論文があり、桜や栗のしだれ木が精霊の木を依り所とする信仰と関係することを論じ、幽霊が柳の木の下に出現するという俗信に言及されてゐる。この水蜘蛛の話の柳も、この方面から考えてみなくてはならない。次に角結び草履については、それが魔除けの効力を有するという俗信が所々に行なわれてゐる。「服装習俗語彙」には次の如く解説されてゐる。

結の両端を出して結ぶのは水引などでも皆角結びと云う

が、北九州の角結びは主として草履の緒に就いて謂う。足平という草履には角結びが最も広く行われている。この結び方には一種の神秘力を認め、ツノゾウリをけば蝮蛇に咬まれぬなどと云う。房州ではこれをマエムスビ、八丈島の大賀郷ではヘブ（蛇）ツブリなどと云うそうである。

ツノブスビ、ツノンボは足平の別名ともなっており、佐賀県小城郡南山村では、これを人柱に立つときの結び方だというなど、この結び方に呪力を認めていたことはわかる。

さて話を進めるため、もう少し類話を並べてみる。柳田先生の「遠野物語」一八三話に次の話が見えている。

「土淵村字栃内琴畑の者が川魚釣りに行って小鳥瀬川こがらせの奥の淵で釣糸を垂れて居ると、時々蜘蛛の巣が顔にかかるので、其都度顔から取って傍らの切株に掛けて置いた。其日はいつもに無くよく岩魚がついたが、もう日暮れ時になったので惜しいけれども帰ろうと思つて居る折柄、突然傍らにあったこの根株が根こそぎ、ばらっと淵の中に落ち込んだので吃驚した。家に帰ってからハキゴの中を見ると、今まで魚と思つて居たのは皆柳の葉であつたそうなる。」

また同書一八四話には、

「佐々木君の隣家の三五助爺、オマダの沼という所へ行つて釣りをして居ると、これも青い小蜘蛛が時々出て来ては顔に巣をかけてうるさかったから其糸を傍の木の根に掛けて置いた。すると突然、其根株が倒れて沼に落ち込んだと謂う。又小友村四十八滝のうちの一の淵でも土淵村の人が釣りに行

つて居たら同じような蜘蛛の糸の怪があつたそうである。よく聞く話であるが、村の人達は斯うしたことをも堅く信じて居る。」とある。

この二つの話は前掲のものとやゝ違うが、蜘蛛の怪であることには変りがない。釣った魚が木の葉に變つてしまつたことは他でも聞く話である。「愛知県伝説集」によれば、三州北設楽郡名倉川上流のヨバリ淵は、碗貸伝説のある淵であるが、ここであつた魚は家へ持つて帰えると木の葉に變つていくという。狐狸が木の葉を金と見せかけて人を化かすということよりも魚に見せる方が早くからあつた話といえよう。

柳田先生の「日本昔話集」にも水蜘蛛と題してやはりこの話が出ている。岩代伊達郡の資料である。むかし奥州半田山の沼で夏の頃に或人が釣りをしていると、珍らしく其日は沢山の魚が釣れて、僅かな間に魚籠が一杯になった。ひどく暑い日だったので、其人は跳になつて足を水の中に浸していた処、何処からともなく一匹の水蜘蛛が水上を走つて来て、其足の拇指に糸を引懸けて行つた。そうして間もなく又来ては同じ所に糸をかけるので不思議に思つて、其糸をそつと拇指からはずして傍にあつた大きな楊の株に巻きつけて置いた。すると、やがて沼の底で次郎も太郎も皆来いと大きな声で喚ぶ者があつた。それにビックリしていたら魚籠の中の魚が一度に皆飛出して逃げて終つた。其中に沼では大勢の声でエントエンヤラサアという掛声と共に、其蜘蛛の糸を引張り始め見ている前で太い根株が根元から折れて終つた。其時から誰

一人、今に此沼へ釣りに行く者はないそうである。

この妖怪が声を発したというのは先にあげた仙台の賢淵の伝説がそれであるが、大勢で糸を引いた掛声がしたというのは早川孝太郎氏の「三州横山話」にも見えている。滝川村の奥から流れる大荷場川と云う川に瀬戸ヶ淵という淵があつて其処にはブト（ハヤの一種）の類が沢山いたが、淵に悪い主がいて命を取られるというので、釣に行く人は稀であつた。

其処へ附近の出沢村の某という者が釣に出掛け、ブトが珍らしく捕れるので時の経つのも忘れてしていると、水面に一匹の蜘蛛が這つて来て岸に踞んでいる其男の足を一巡して還つて行き、淵の真中頃になると見えなくなつた。暫くすると又出て来て同じことを繰返すので、不審に思つて足元を見ると、細い蜘蛛の糸が幾重にも巻きついているので、其糸をとつて傍の杉の切株に引掛けて其儘釣をしていると、淵の底の方でヤアと大勢の掛声がしたと思うと、切株がそっくりもぎ取られて淵の中へ沈んで行つたと云う。

水の主が声を出した話は、鈴木重光氏の「相州内郷村話」にも天狗坊淵の怪異として紹介されている。内郷村の隣村日連村青田に天狗坊という大深淵がある。この淵の深淺によつて作物の豊凶を卜する習慣があつた。この淵には鰻が多いので、野良坊という鰻捕りの業者がある時釣をしていた。すると水中から大きな蜘蛛が出て来て、野良坊の履いていた鼻結びという草履の鼻緒の結び目に、糸を懸けては水中に引込んだもうとする。余り五月蠅いから追い払うと、又来て糸を懸け

る。そのうちに何処ともなく「天狗坊の何太郎」とか云う声がかきこえたかと思うと、魚籃に入れてあつた鰻が残らず消え失せてしまつた。また此淵で鰻を沢山とつて帰ろうとする、山の方でテンゴンボウと呼ぶと、魚籃の中の鰻が「さらばよ」と答えたので、魚籃を投げ捨て急いで逃げ帰つたという話もある。淵の主である鰻が蜘蛛の姿になつて出てきたらしいが、発した言葉から考えると天狗の仕業とも受取れる話である。

例証をあげたついでに似寄りの話であるが、「静岡県伝説昔話集」から二話あげておきたい。榛原郡上川根村千頭に伝えられている話である。或人が谷合いの草木の生い茂つた薄暗い淵で糸を垂れていると、向う岸から小さい蜘蛛が糸を引張つて来て釣をしている人の足の親指に引つかけて又向う側へと糸を引いて行つた。その人はこんな所に糸をかけなくてもよさそうなんだといいながら、指にかかつている糸を切つて側の木の切株へかけて置いた。するとその木はめりめりと音を立てて淵の方へたおれて行つたという。同書にはまた周智郡三倉村の話として、大久保のトイ淵という所で天の魚を釣っていた人のことがある。白い雲の断片が何処からともなく湧いて来て足の拇指の辺をぐるぐる巻いたように感じた。変に思つて見つめていると、暫くして消えてしまつた。すると池の中へ引込まれそうな気がした。恐ろしくなつて逃げようとしたが、引込む力はますます強くなつたので、持つていた刃物でぎくつと切るようにしたら、もうそれでよかつ

たという。これには別に蜘蛛とは書かれてないが、雲の断片というのはどういふことかわからず、あるいは蜘蛛の聞きまぢがいかもしれない。

以上の伝説がいずれも蜘蛛の怪を主題としているが、蜘蛛が水の主ということに合点が行かないためか、「愛知県伝説集」には池の主のストップンが蜘蛛に化けてきたという話がある。葉栗郡での話といふ大約百年前のことという。源兵衛という者が浅井の池へ毎日釣に行つたが、ある日釣をしていると池の中から一匹の蜘蛛が出てきた。そして源兵衛の足に糸をくるくると巻いて池の中へ入つた。こんなことが一週間も続いたので、源兵衛は蜘蛛に向つて、「お前は俺の足に糸を巻いて行く。それが今日でもう七日になる。お前はただの蜘蛛ではあるまい。性のあるものなら形を現わせ、現わさぬと殺してしまふぞ。」といつてその蜘蛛を池の中へ逃してやつた。すると池の中から周り数丈もあらうと思われるストップンがぬつと現われた。見るからに数千年も経たらしく耳まで生えていた。源兵衛は、「貴様はよくも蜘蛛に化けていたずらをしたな。今後の見せしめに耳を切つてやろう。」といつて片耳を切つてしまつた。それから数年を経たのち、村の貝一という人がこの池の端にいくと片耳のない蛇のような怪物が頭を出してじろりと睨んだという。怪物にしては随分おとなしい怪物であり、もとの話はもう少しちがつていたかもしれない。水の主に耳があつたということは同じ書物に、尾州丹

羽郡扶桑村南の臥竜庵の話がつている。昔、大きな耳の生えた蛇が棲んでいて和尚の受戒を受けたとある。

同じ耳の話であるが怪物ではなく人間の方の耳についての物語が宮本常一氏の「吉野西奥民俗探訪録」に掲げられている。寺井氏の先祖が川へ魚をとりに行つて釣糸を垂れていると、はいてある草履の角むすびに蜘蛛が来ては糸をかけて行くので、じつと見ていると引張りだした。だんだん足まで引いて行くので、急に引上げるとガタロ(河童)であつた。そこでひきずり歩くとガタロは大きな柿の木にしがみついて動こうとしない。だが陸に上つたので弱かつた。「子孫までとらぬから助けてくれ」といふて頼むので許してやつた。そのしるしに耳タブに穴をあけておくからその者はとらぬといふて川へかえつた。それから寺井氏の一族には川でおぼれた者がな。また耳タブに針で突いたほどの孔がある。

この話は今まで列挙した資料とさまで変つてはいないが、この伝説の起原と背景をなしている信仰生活を知るのに大切な要素を含んでいる。これもまた角むすびの草履をはいていたために危難を免かれたのだらうと思われる。ただこの話で注意すべき点は水の主が蜘蛛でなく河童だつたことである。そして河童が人に捕えられ、許してもらつたかわりに人を取らないと約束した話は全国各地に分布している。土地によっては河童が片腕をとられ、それを返してもらつた御礼に傷薬の秘伝を授けていつた話がある。また助けて貰つた御礼に毎朝井戸端に魚をとけるようになったといふものもある。河童

が本来水の神の姿であり、それが零落して妖怪のように考えられるにいたったことは今日民俗学上大体異論なく承認されているといえる。してみると、ここに問題として取上げた水蜘蛛をはじめ、蛇や鰻なども同じく水神の妖怪化した姿と見ることができよう。蛇が水神の性格を持っていることは古語のミヅチなどからも納得できようが、鰻もまた同様であったことは東北地方の岩手、宮城の二県などで祀られている雲南神などの信仰からも考えられる。これについて早川孝太郎氏の詳細なる研究が、その著「農と祭」の中に「鰻と水の神」と題して記述されている。鰻を神使とする池や淵が各地にあり、鰻を食べないという例が少なくない。その代表的なものが雲南神であり、雲南権現社として祀る土地が多く、虚空蔵を本地仏とし信者が鰻を禁食していることはひろく知られている。宮城県本吉郡柳津の虚空蔵は有名であるが、町民は鰻を食わず、旅館などでも客が注文しても断わるという。万一病氣などの療養でやむなく食べたときは鰻の絵馬を奉納する習慣がある。この雲南神について注意すべきことは、湧水を求めて祀るということで、水田を支配する水の神としての要素が濃厚なことである。早川孝太郎氏はこの神が水の神であると同時に田の神としての要素を加えていたことは偶然でなく、最初から鰻と同一であったかどうかは問題となし、地中から湧き出る水を支配する者の象徴を、水中に棲息する、ある種の動物にもとめたのが、あの蛇に形が似た鰻に固定し統一されるようになったのではないかといわれているのは妥当

な見解といえよう。

ここで話を最初の水の神にしばらく戻して考えてみる。人が生命を保っていくのに何よりも必要なのは空気と水である。しかし空気の有無はまず問題にならないので、人間が居を占めるには水が最初の関心事となる。水のない所には居住できない。したがって水の得られる場所にまず家を建て、村をつくるのが自然であった。今日多くの村を訪れて一番旧家といわれている家が概ね用水の便利な場所に家を構えていることの多いのはこのためである。地名や家名に水、川、池、沼、泉、井などの語を用いたものの多いのは水と居住とが深い関係を持っていたことをよく示している。

さて人が居を占めるには土地の神の承諾と保護を受けることが必要であった。ある土地を利用する場合、まずその土地の神を祀る習慣は今日も実際に行なわれている。都会地でも家を建てる時は必ずシメをはって地鎮祭をする。これなどただ御祓いをするに過ぎないと思われているが、本来は土地の神の承諾を得てその土地を使わして貰う意味があったのである。このことは山を開いて焼畑作をするとき、地貰いということをするのでもわかる。山の神から土地を貰うのである。そしていよいよ火をつけて山を焼くときには、山の神も蛇もどいてくれという唱え言をとなえる。神の承諾や保護があつてこそ、土地を占有利用できると考えていたのである。

当面の問題として取上げた水の神も山の神と同様であり、われわれはその恩恵の下に安住できたのである。水の神は人

間にいろいろな利便をあたえてくれる。たとえば先に述べた三州名倉川上流のヨバリ淵の櫛貸伝説などその一例である。

この伝説は全国に広く分布しており、櫛梳類を予め必要の数だけ頼んでおくと、それを間違ひなく貸してくれるという。

その多くは特定の池や淵に関して語られている。つまりこれも水の神の恩恵の一つといえることは、信州その他で櫛梳の貸主を河童としている伝説があるからである。小池直太郎氏の「夜啼石の話」の中から一例だけをおげておく。

信州上水内郡鬼無里村大字蓬平の者、朝草刈に行くと、草刈のすむまで馬を川へ追い込んでおく。これは馬のねいらを癒すためだという。ある朝のこと、朝草刈から帰り、馬を厩に入れると尻尾にしっかりとつかまっているものがある。見るとそれは河童であった。打殺してくれようとする、どんな用事でもするから勘弁してくだされと詫びたので逃してやった。この川の淵から櫛梳を貸してくれたが、それは河童の恩返しにしたことであろうといわれていたが、その一つを横領したものがあつたので、つい貸さなくなつたという。

吉野西奥の話で河童と人とが約束をし、寺井氏のものが耳たぶに穴をあけておいて河童がとらない目印にしたというのは興味ある言伝えである。耳たぶに穴のある者というのは諸地方でいうことであり、これのある人は蛇をつかむことができるという。これについては柳田先生の「耳たぶの穴」（ひだびと六ノ八）、「にが手と耳たぶの穴」（民間伝承八ノ七）の二論考がある。私の郷里山口県ではこのことをいう地方が多

いが、穴といつても私の見たところ小豆の小粒ぐらいの大きさに皮膚がへこんでいるに過ぎない。いままでに報告された資料によると、耳たぶの穴は特定の一族一家に見られるといひ、それについての言伝えがある。しかし一族全部を実際に調べたものではないので、真のほどは明白でない。この問題についての柳田先生の仮説を要約すると次の如くである。わが国ではかなり近世になるまで、呪いや祈禱に従事する女子または童児が、耳たぶに何か金属の環をはめる習慣があつたのではないか。そしてその職業が世襲であつたために、代々耳たぶの形が普通とは変り、その後天的の特徴が固定してしまつて、久しく業をやめたただの百姓になつた後まで、子孫にその形を遺伝するのではないかという趣旨である。日本にも耳環をはめる風俗のあつたことは考古学の方面からの報告もあるが、かかる風習が体質として遺伝するかどうかは問題であろう。これについて山川振作氏は遺伝学の立場から「民間伝承」八巻十号に次の如く述べられた。この耳たぶの穴といふのは先天性耳瘻孔というもので日本人では大体三パーセントくらい存在する。ヨーロッパでも遺伝的なものと考えられていようであり、日本でもメンデル優性遺伝をするという人が多い。多数の遺伝因子によって生ずるものらしいとある。

特殊な体質遺伝に関して民俗の方面から問題とすべきものが多いとある。家筋によって鶏、卵、章魚、アワビ、南瓜、トウモロコシなどを食べないというのがある。沖縄にシ

ナから渡ってきたというある一族のものはサメを食べない。食べると皮膚に一種のできものができるという。これ明かに家筋による体質遺伝の俗伝であるが、わが国における禁食について、それを犯した場合、ただ神の祟りがあるという程度で、体質上の特異性が見られるかどうかについては報告がないようである。もちろん、こういう場合には体質遺伝というよりも心理上の問題として考えなければならぬものがあると思うが、食物上の禁忌と体質遺伝との関係について調査してみることがある。

家筋によって体質上特異な遺伝が見られるという伝説は、しばしば聞くとこである。有名なのは緒形氏にまつわる伝説で蛇の鱗の形をしたものが代々身体に遺伝するという。高木敏雄氏の「日本伝説集」に掲載されている越後国南蒲原郡の伝説に次のようなものがある。

南蒲原郡の笠堀という村で、昔、村長甚右衛門の娘に美人があった。いつとなく若い男が夜毎に訪ねてくるようになった。名乗りもせず所在も告げないので、娘は男が帰えるとき男の裾に針をさした。夜明けになってから針の糸をたよりにたずねて行くと、八木山下の川の淵に苦しそうな声が聞えた。のぞいて見ると大蛇で、自分は毎晩お前の処へ通ったが針をさされたので死なねばならない。お前は達者で暮してくれ、自分はお前の家を守ってやるといって大蛇は姿をかくしてしまった。その後村長の家では、当主の腕の下に三枚の鱗が生えるといわれ、南北朝時代の勤王家五十嵐小文治も、こ

の村長の子孫だという。かかる類話は各地にあり、中山太郎氏はかつて「動物の子孫」(「信仰と民俗」所収)という論文の中で、諸地方の例をあげ、トーテムズムとの関係を考察されたが、それはまた別問題として、ここには触れないでおく。

さて話を水の神にかえして考えると、枕貸伝説の結末はいずれも貸してくれた膳枕を不心得の者があって一つかえさなかったもので、それから以後は貸してくれることが止まったとある。そしてその膳枕を家宝として伝えている例もある。これは人間と水の神との絶縁を語った伝説であると思う。これが河童の話となると一層明白で、河童が毎日魚をもってきてくれたのに、あるとき井戸端に庖丁を置いておいたため、それから来なくなったという話が多い。つまり河童、すなわち水の神にとって鉄が禁忌だったことを語っているのである。また河童の嫌いな蓼を食べさせたので以後来なくなったという話もある。これら水の神との絶縁譚はどういう意味を持っているのであろうか。神と人間との交渉の自由であった古代から開化した人の世となると神界と人界とは遠ざかり、そこに神人絶縁譚の生まれることは考えられる。

水の神は今日では部落で祭っているのが多く、部落共用の飲料水の取り口などに小さな水神の石祠がよく見受けられる。しかし特定の家で祭るのも勿論あり、村の起りを考えれば、いわゆる草分の家が村に居ついて、そこに水神を祭った形式が想像される。水の神はあつい恩恵を人間に与えてくれ

るが、一度怒ると中々恐ろしい神であった。旧家として栄えている家には、水の神の恩寵を蒙った家がしばしばあったことと思われる。恐らくそういった家の女は巫女として水の神に奉仕したのであろう。そこに水の神との神婚伝説の生れた理由も考えられる。それが後世になると、信仰が衰微して蛇、鰻、蜘蛛の如きが水の主として妖怪視されるにいたり、水蜘蛛の術といわれる伝説など語られるようになった。そしてかかる伝説の分布にはこの話を持って歩いた座頭のような

ものが考えられるのである。

人間の生命の源泉としての水に対する信仰は、産湯や湯灌などの生死の儀礼からもうかがえる。特定の泉や井戸の水がそのために指定せられていた。生命の附与や復活についての水の信仰については、また改めて考えてみたいと思う。いまは水界伝説の一端から水神信仰の変遷の跡をたどるにとどめておきたい。